

地域が発する問いと向き合う学習

アサザプロジェクトでは、子ども達が自ら地域や社会が発する答えの用意されていない問いに気づき、自分の方法で問いに応え解決方法を考える学習を、霞ヶ浦流域をはじめ全国各地で行ってきました。ここでは、学習事例と共に問いに応える学習の流れを紹介します。

「どのように」の前に、「なぜ、どうして」から始める学習。

環境学習では、はじめから課題や問題への解決方法「どのようにしたらいいのか」（答えの共有）に向けて進んでしまう例が見られます。その背景には、環境問題の多くが、すでに社会的課題や問題として一般化され子ども達や先生達に浸透しているため、地域の課題や問題として捉え直すこと（なぜ、どうしてという問いの共有）を十分にせず、様々な地域の事例などを参考にして解決方法（どのように）を求めようとする傾向があります。

そのような「調べ学習」の延長では、自分が得た知識や情報を発表し合うだけで、ひとりひとりが問いと直接向き合い自分で考える機会を、子ども達に提供することができません。

環境学習は、本来子ども達自身が課題や問題の存在する理由「どうして」を、自らの問いとして立て、仲間と問いを共有することから始まります。自分たちの地域には、どのような課題や問題があるのか、それらはどのようにして生じたのか、それらの原因を探っていくことで、それまで深く考えずにいた地域の構造や様々な要素や繋がりにも目が向けられるようになるはずです。これらの構造や要素（地域に固有の繋がりや文脈）に目が向かなければ、子ども達は自分で考えた内容のある仮説を立てることもできません。また、集めた情報や知識を有機的に繋ぎ合せて生かすこと（総合化）もできません。



体験学習やブランドづくり学習の課題

学校で行われている体験学習には、先輩達から代々受け継いできたものが多くあります。先輩達が残していった思いや願いを受け継ぐということには意味がありますが、継承することが目的化してしまい、初めから体験ありきになってしまう傾向があります。今は恒例化している体験学習にも、初めには動機となる問いがあったはずですが、しかし、体験を継承していく過程で、発端となった問いが忘れられてしまう例（やることに意義があるという例）が多くあります。

体験学習がこのような流れにならないよう、学年から学年への引き継ぎをしっかりとやっていくことが大切です。そこでは、何ができていて何ができていないのか課題や問題は何かといったことを引き継ぐことが重要です。引き継ぎの主なテーマは、答え（やると決まっていること）ではなく、問い（課題や問題としてあること）です。

同じように体験や作業が先行してしまう例が、最近行われるようになった子ども達による地域ブランドづくりにも見られます。地域に元々あった特産物に子ども達なりのデザインやネーミングを施してみたり、特産物を生かした加工品などを提案してみたりする例が各地で見られますが、多くが学習の初めから「どのようにして」という方法に入ってしまう傾向があります。しかし、それでは子どもらしさや若者の感覚として評価されることはあっても、地域を深く掘り下げる学習には結びつきません。

ブランドづくり学習には、子ども達が地域の問いに応え地域を見直し、答えを求め、地域に潜在する価値や可能性に気づき、それらを具象化する物づくりを考え、物を通して地域の価値や可能性を表現するというプロセスが重要です。

このような学習を通して、子ども達は自分の目で地域を見直し、自分で得た感覚を頼りに地域の価値や可能性を見出し、自分の方法で考え表現する力を身に付けることができるからです。



他の地域との交流学習の課題

子ども達が他の地域と交流し、学習の場を共有することは意味のあることですが、ここでも「問いの共有」が重要なキーワードになります。交流学習でも体験の共有が先行し目的化する例が多く見られます。

環境学習では、異なる地域同士で共通する課題や問題があっても、取り組み方や解決方法などに違いがあることに気付くことが重要です。それらの違いは、課題や問題への向き合い方や地域特性を反映した結果です。子ども達には、交流を通して互いに同じことをやっている（答えの共有）という確認以上に、問いへの応え方の違いに気づいてもらいたいと思います。答えに反映された違いに気付くことで、子ども達は他地域との違いや自分たちの地域特性をより深く理解できるようになるからです。



「問いの共有」と「答えの共有」

学習の動機付けの段階で、「問いの共有」（なぜ、どうして）が不十分だと、その後に子ども達ひとりひとりの多様な考えや感じ方を反映した豊かな学習が実現なくなってしまいます。初めから子ども達に「答えの共有」を意識させると、答え（解決方法）を選ぶという流れになってしまいます。しかし、答えは事例や選択肢の中から選ぶものではなく、子ども達自身が問いと向き合う中で自ら発見するものでなければなりません。

子ども達は高学年になるほど、知っていることや知識として得ていることを発表しようとする傾向があります。知識や情報の積み重ねでは、全体に分析的な方向で学習が進みがちになります（答えの積み重ね）。分析的な学習では専門分野の壁に阻まれ多様なものの融合（総合化）が難しくなり、子ども達自身によるユニークな発想が引き出しにくくなります。

その一方で、低学年の学習では子ども達の知識は多くはありませんが、学習の流れの中で子ども達自身が感じたり気が付いたり関心したりしたことをその場で直ぐに言葉にして発表することができます（問いの連鎖）。このように学習の初めの段階で子ども達が自由に感じたり関心したりしたことを言葉にして発表し合える環境を整えることは、知識や情報を組み合わせ総合し、問題解決に結び付く新しい発想を生み出す学習の流れを実現するためには不可欠です。そのためには、最初に、子ども達が問いと出会って感じたり思い付いたりしたことを、言葉にして発し共有し合う場を作っておくことが大切です。

「問いの共有」では、未知のものに向けて子ども達の心を開くこ



とで多様性を受け入れようとする姿勢をつくることができますが、「答えの共有」では、どうしても答えの集約に向けて多様性を排除しようとするバイアスが生じてしまいます。

そのため、初めから答えの共有に向けて動き出すと、子ども達が自分で選んだ答えや方法に固執してしまい多様性を生かした学習が難しくなってしまいます。その結果、子ども達は説得力のある子に誘導されたり、多数決に頼ろうとするようになります。



問いに、「応える」と「答える」

総合学習がうまく展開できない場合には、「問いに応える学習」が「問いに答える学習」と混同されていないかを確認することが必要です。地域や社会の課題や問題、あり方などに取り組む総合学習では、予め決まった答えが用意されているわけではありません。

このような答えの用意されていない問いとどう向き合うのか、問いに応える姿勢を学ぶことは総合学習の大きな目的のひとつです。（このように問いと向き合い応える姿勢を学ぶことは、普段の教科学習にも有意義です。問いと接し直ぐに答えを導き出す方法に向かうのではなく、問いがどのようにして立てられたのか、なぜ問いが生まれて来たのかを学ぶことが重要です。）

子ども達が問いに応えるという姿勢を持って学んでいくことができれば、学習や話し合いを重ねていく過程で大きな壁に直面し行き詰まった時など、いつでも初めの問い（共有された場）に立ち返って考え話し合うことができ、学習の最後の段階まで多様性を受け入れ柔軟に変化できる「学び合い」の姿勢を持続することができます。

問いに応える学習で導き出される答えとは、子ども達自身による総合化の実現（自分の方法で考えること）を意味します。そして、このような問いに応える学習の前提には、子ども達による問いの共有（場の共有）があります。

多様性を受け入れる姿勢と共感力を養う。

初めに問いの共有をしっかりとしておくことができれば、子ども達がその後の学習で様々な意見や考えに接しても、単純にどちらが良いかを評価しようとする以前に、ひとりひとりの問いへの向き合い方の違い（多様な見方や考え方、感じ方があること）を理解しようとするようになります。

このように、ひとつの問いに対しても様々な見方や感じ方があることに気づき、自分とは異なる視点や感性を発見した驚きが子ども達の心を開き、多様性を受け入れる共感力を育みます。子ども達は、共感によって異なる考えや意見を取り入れ、自ら脱皮することができた時、自らをより高めようとする意志「学ぶ意欲」をより強く持つようになります。共感によって違いを乗り越えることができれば、より高い次元に向かうことができるという体験は、子ども達の心の成長を促し包容力のある豊かな人格を育むことにもつながります。



問いを立て直し共有する～問題の資源化。

課題や問題の解決は、それらが生じた背景にある地域固有の構造や要素や繋がりに気づくことから、その手がかりが見出されるものです。このような探求（地域が発する問いに応えること）が不十分なまま、子ども達に解決方法を考えさせ提案させる学習（事例を調べる学習）は、子ども達に学習意欲や充実感、達成感を与えることができず、形式的なものになりがちです。

子ども達の探究心を刺激し主体的な学習を促すためには、課題や問題をもう一度自分自身の問いとして立て直すことから始めなければなりません（当事者意識を持たせる）。それは、子ども達に自分が地域の問いを共有する一員であることに気付かせることでもあります。そのようにして、地域の特性を理解し問いを深めていく中で得られる様々な気づきや発想が、地域の特性や文脈を生かしたユニークな仮説やアイデアを次々と生み、活発な議論を促し、皆が共感できる解決方法の提案へと結実していくのです。このような学習によって、問題を解消するという発想から、問題を資源化するという発想への転換が促されます。



多数決によらないより高い次元での合意形成（総合）を目指す。

このように最初に問いを共有することで、多様な意見や考えを受け入れる共通の土俵が生まれ、その後の学習の中で子ども達同士が活発な意見交換をできる環境を作ることができます。また、問いが共有されることで、自分やグループで選んだ答えに固執することなく、柔軟に他者の意見や考えを取り入れ、多数決によらず共感によって多様な意見や考えをより高い次元で融合させ、まとめていく学習の流れ（創発）が生まれるのです。このように「問いの共有」は総合化を促します。

このような学習を体験することで、将来社会にイノベーションを引き起こすことができる人材が育成できると考えます。

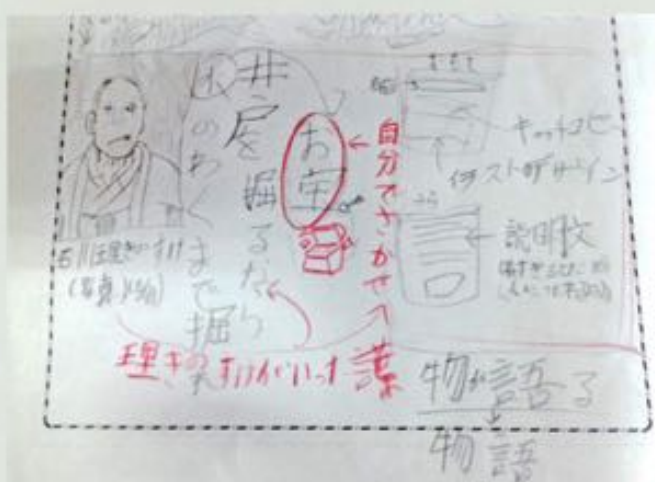


問いと向き合い続けることで自らの生き方を見出す。

地域の課題や問題には、長年多くの人々が取り組んできたにも関わらず解決方法を見出すことができないものが少なくありません。それらは、その土地が発し続けてきた答えの見えない問いと言うこともできます。子ども達が学習を通して、このような答えの見えない問いと向き合うことは難しいことかもしれません。しかし、人はそのような土地が発する問いと向き合い続けることで、その土地で生きる生き方を、自分の方法で見出すことができるようになるのではないのでしょうか。

地域が発する問い。それは先人が応え続けてきた問いでもあります。地域の先人が問いと向き合いながら、何を目指し何を成し遂げ何を課題として遺していったのかを理解し、自らも問いと向き合うことで、先人を過去の歴史の中ではなく今を生きる歴史として捉え直すことができます。このようにして、先人と問いを共有しているという意識も生まれてきます。

地域の担い手とは、このように地域が発する問いと真摯に向き合い、答えの見えない問いに応える誠実な生き方を学ぶことから生まれてくるのではないのでしょうか。



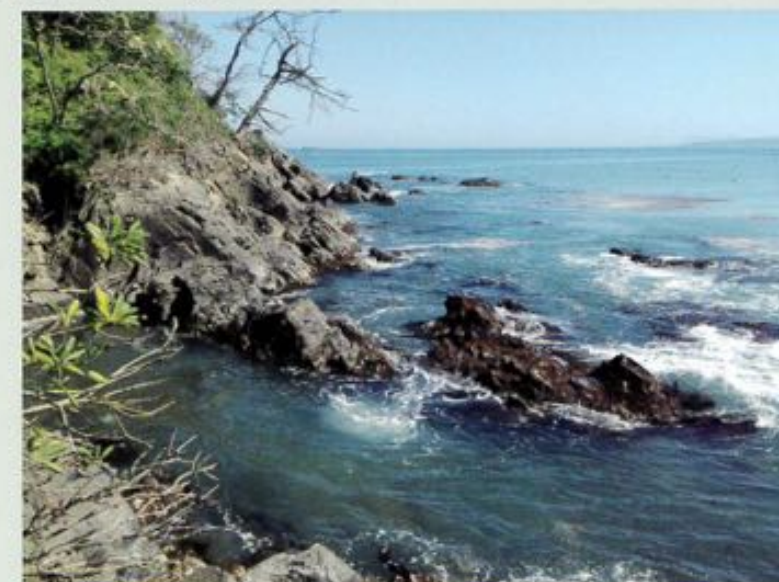
アサザ基金は、全国各地で子ども達とその土地の問いと向き合い、未来を考え提案する学習を行ってきました。ここでは、災害からの復興や過疎化といった地域の課題や問題をテーマに取り組んだ学習事例を紹介します。

地域のつながりを見つめ直す復興計画作り 宮城県南三陸町

リアス式海岸の美しい風景や豊かな海産物に恵まれた宮城県南三陸町は、2011年3月11日の大津波によって壊滅的な被害を受けた地域のひとつです。町の大半が津波による被害を受け、多くの人命が失われ、漁業や農業も大きな損害を被りました。現在、復興事業が行われていますが、今後どのように新たな町づくりを進めていくのか、まだ十分な見通しが付いていない状況が続いています。

そのような状況の中で、地元の子供達は日々様々な場面に接し暮らしています。この地域の未来を担う子ども達が、復興に向けて変化しつつある地域から何を感じ取り、そこからどのような未来を描こうとしているのか。子ども達の心の動きや歩みに寄り添いながら復興のあり方を考える学習の場が必要です。

未曾有の大災害からの復興には何十年もかかると言われています。子ども達もいつかは復興の担い手となることでしょう。そのためには、長く地道な復興の歩みと、子ども達の成長の歩みが重なり合う場が必要です。ここでは、「復興とは何を意味するのか」という問いと向き合い未来の町づくりを提案する学習について紹介します。



1. 「復興とは何か」という問いと向き合うことから始まる学習。

子ども達は、復興事業によって移り変わる地元の様子を見ながら何を感じ、どのような思いを持って暮らしているのでしょうか。子ども達の心の片隅には、将来自分達が復興の担い手となるという当事者意識はあるのでしょうか。

この学習は、子ども達が「復興とは何か、何を意味するのか」という問いと向き合うことから始まりました。「復興とは何を意味するのか」という問いに応えるためには、まず自分たちの土地の成り立ちや特色を知る学習から始める必要があります。それは、地域が発している問いに気づき応えることでもあります。なぜなら、復興の対象となるのは他でもない自分達の地域だからです。土地の成り立ちを知るとは、地域やそこに生き暮らす者達を支えてきたものは何かを理解することでもあります。

この「復興とは何か」という根本的な問いは、子ども達が暮らしの中で感じた素朴な疑問や気づきの中から引き出すことができました。それは、土地が発する問いに応えることでもありました。



2. 「川はすぐに復興したよ」子どもの呟きから問いが動き出した。

授業が始まり、すぐに子ども達から聞かされた言葉が印象的でした。教室の窓から見える風景は、まだ瓦礫の山が所々にあり被災の生々しさが残っていましたが、私がふと「まだ大変だね」と言うと、子ども達が「でも川はすぐに復興したよ」と応えてきたのです。私が「どういうこと」と聞くと、「川には生き物がすぐに戻って来たんだ」という言葉が返って来たのです。

「え、本当に。」「どうして戻って来ることができたんだろうね？」「どこから戻って来たんだろう？」子ども達は普段感じていたことやその場で思い付いたことを次々と発表し始めました。そのようなやり取りから、ひとつの問いが生まれて動き出し、復興とは何かを考える学習が始まりました。

子ども達が気付いた自然の再生力の凄さ、生き物達が戻って来たことの不思議さ、それらの素朴な疑問や驚きが、答えの用意されていない問いと向き合う学習の原動力になりました。



3. 川の様子を観察に行き、生き物から繋がりを教えてもらう。

川はどうしてすぐに復興（再生）したのか？その問いのヒントは、川に戻って来た生き物達から得られるのではないのか。川の生き物達から大切なことを教えてもらえるのではないのか。

教室で生き物とお話しする方法「生き物の体のつくり、すみか、くらしの関係」を学習し、生き物（他者）の目で地域を見直す方法を学んだ後、校外へ観察に出かけました。更地になった被災地や森の中を歩いて、学区内を流れる川に着き観察を行いました。そこは海に近い下流のため淡水から汽水、海水に棲む様々な生き物が見られました。産卵のために海から川に遡上してきたシロウオや上流から流されてきたヘビトンボなどの水生昆虫や森の落ち葉、山から運ばれて来た様々な石、川岸から湧き出る地下水などを観察することができ、子ども達は川には海や山、森との繋がりがあふれていることを感じ取ることができました。

そして、生き物達を通して感じる事ができた海や山や森との繋がりがこそが、「川がすぐに復興（再生）した」理由ではないかという感覚を得ることができました。



4. 漁師さんから海の豊かさの秘密を聞く。

川の生き物を通して感じる事ができた繋がりを、海や山や森それぞれについて考える学習を行いました。まず、子ども達にとって身近な海から、地元でカキやワカメの養殖をしている漁師さんに海の中の様子を聞きました。漁師さんは津波による被害や、被災後の海の変化を話してくれました。海の中でも被災後に魚や海藻が次々と戻って来たことや、再開し始めたワカメやカキの養殖についても話してもらいました。

漁師さんは、海の再生力の凄さや美味しいワカメやカキが採れる秘密を子ども達に教えてくれました。リアス式で湾入部が多い海岸地形であり、多くの川が山から海に流れ込むため、海の生き物達が山や森のミネラルを豊富に得ることができ、豊かな海の幸を育んでいることなどを学びました。

漁師さんの話を聞いた後、子ども達は地元の地形図や衛星画像を見て、湾や流入河川の多さを改めて実感することができました。

その後、実際に海に行き、ワカメ養殖の体験やプランクトンや魚などの海の生物の観察も行いました。



5. 「地元のワカメはなぜ美味しいのか」山や森から海を見直す。

つぎに、漁師さんが教えてくれた海を豊かにする栄養やミネラルの在り処を探しに、山や森へ観察に行きました。最初に以前観察をした川の水源に当たる山に行き、様々な種類の森があることを知り、森の中の様子を見て回りました。ミズナラの森の中では腐葉土でふかふかになった林床や所々に露出した岩石や土、土壌生物や地下からの湧水などを観察しました。ここでは、森の落ち葉や生物や風雨などが作用して、岩石からミネラルが溶け出し、川や地下水脈を通して海に運ばれていることを実感できました。

最後に、山頂へ自分たちの街や海の様子を眺めに行きました。山頂に着くと遠くに光る海の方から、雲が次々と山に向かって流れて来る光景を見ることができました。問いと向き合い続けたことで、子ども達は風景から豊かなイメージを得ることができるようになりました。子ども達はその壮大な風景の中に、雲が海から湧き上がり、空を流れ山にあたり雨を降らせ、雨水が山に蓄えられていた栄養やミネラルを溶かし、川や地下水脈を通して海に届ける壮大な繋がりを感じ取ることができるようになりました。自然の中にある壮大な動きや循環のイメージを掴んだ子ども達の心の中には、三匹の竜（海から山に流れる雲の竜、山から海に流れる川の竜、森から海に流れる地下水脈の竜）が棲みつきました。教室に帰ってから、皆でそれらのイメージを発表し合い共有しました。



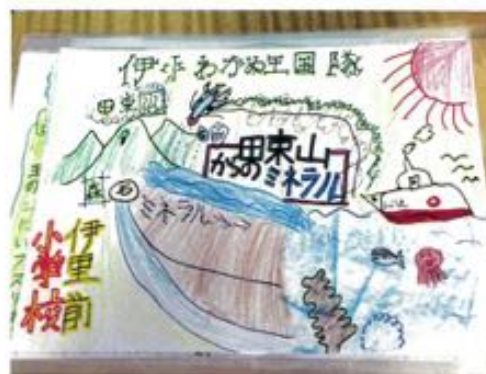
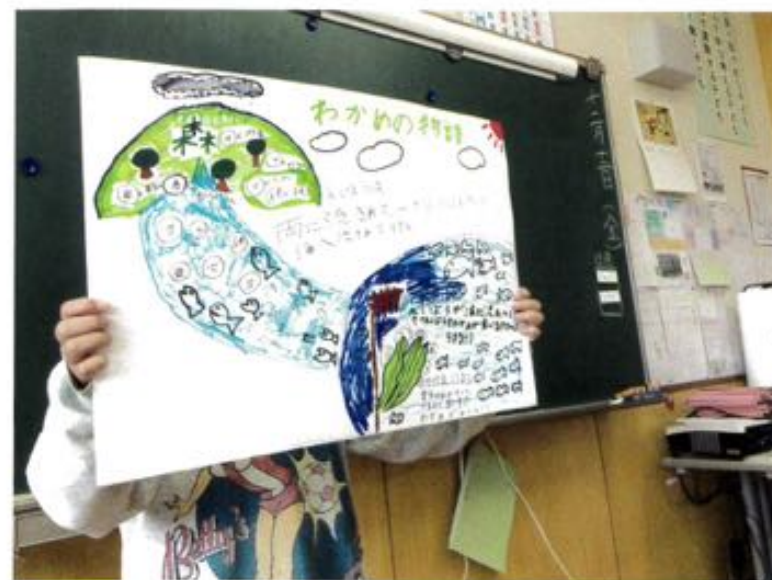
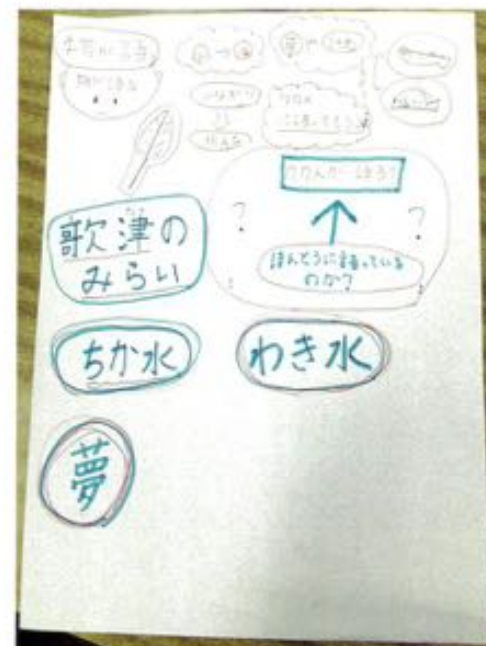
6. 繋がりが価値を生む秘密。ワカメの物語をつくる。

これらの学習を積み重ねたことで、地元のワカメの美味しさが、海や川、森、山などのつながりによって支えられていることに気づいた子ども達は、地元のワカメを通して地域の人たちに繋がりの大切さを伝えようと考え、ワカメが語る物語を作ることになりました。ワカメという物が語るようにするにはどうしたらいいのか？それは、その物がどのようなつながりを通して生まれて来たのかを、その物を通して表現することです。

子ども達は、自分達が考えたワカメの物語をパンフレットやポスター、歌や劇、パッケージデザインやネーミングなどで作品にして発表しました。

この学習を通して、子ども達はワカメだけではなく、地元のすべての人も生き物も海と川と山の繋がりに支えられて生きていることを理解し、同時に、それらが地域を支えている繋がりの意味や大切さを語り伝える存在であると思えるようになりました。

子ども達は、地域の価値を生み出す様々なつながりを大切に生かしていくことが、地域の未来を豊かにする復興に結びつくことに気付きました。



7. 学年ごとの総合学習を総合化

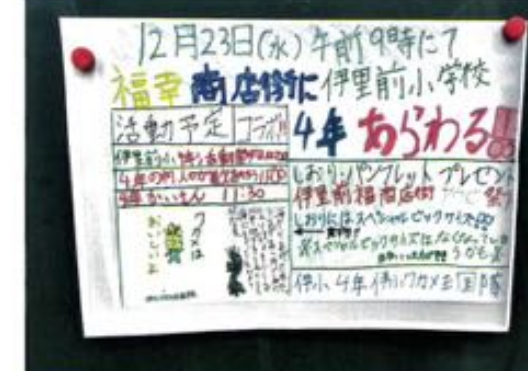
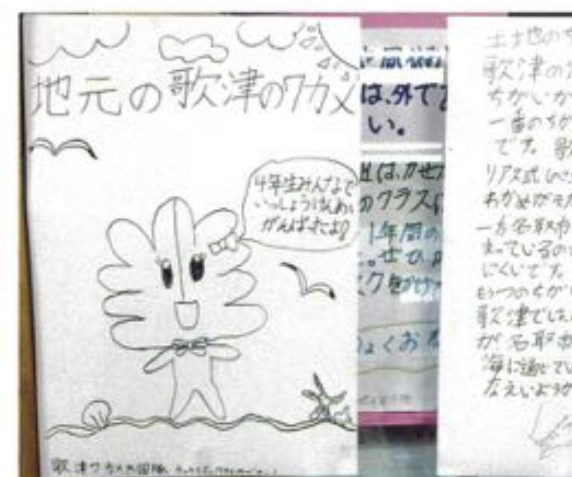
この小学校では、毎年四年生が地元の漁協の協力を得てワカメ養殖の体験学習を行っていましたが、復興とは何かという問いに応える学習を通して、体験学習の位置付けは大きく変化しました。同様に、三年生が行ってきた地域の自然を学ぶ学習も、従来の野外学習や調べ学習から、個々の生物や生態系や人々の暮らしを支える繋がり（地域の成り立ち）を探る学習へと展開することができるようになりました。

このように、地域が発する問いに応える学習を通して、学年ごとに個別のテーマで行ってきた総合学習を関連付け、子ども達が自分の方法で文脈化しながら総合化する学習の流れが生まれてきました。

8. ただの三陸ワカメではない、特別な地元ワカメの物語を地元商店街で発信する。

その地域のつながりは他の地域には無い、地域固有のものであります。そのような地域を支える特色あるつながりを理解することができれば、その地域でしか生み出すことができない価値があることに気付くことができるはずです。そして、そのような地域に潜在する価値を生かそう（浮上させよう）と考えることで、地域の未来に向けたビジョンを描くことができるようになります。子ども達がそのような気づきを得ることができれば、その地域で成長し生きていく自信と誇りが育まれていくのではないのでしょうか。

学習の最後に、子ども達は地元の復興商店街で、地元の特別なワカメが生まれた物語を発表しました。多くの人前で発表する子ども達の表情には、復興の担い手としての自信と誇りが漲っていました。



希少な渡り鳥ブッポウソウはなぜ自分たちの村を選んで来るのか。 長野県下伊那郡天龍村

長野県の南端に位置する天龍村は、天竜川沿いの深い山並みに囲まれた人口約1600人の小さな村です。県内で最も高齢化が進んでいますが、かつては林業やダム建設などで栄えました。村の大半は急な斜面にあり豊かな自然林に覆われています。ここは、国内で数少ない夏鳥ブッポウソウの繁殖地としても知られています。村では長年ブッポウソウの保護活動を行ってきました。

ここでは、生態の多くがまだ未解明なブッポウソウという渡り鳥が発する問いに応えることで、村に潜在する価値や可能性を浮上させる学習について紹介します。



1. ブッポウソウに選ばれた村。ブッポウソウはどうして村に来るのかという問い。

「どうして」から始まる学習は、環境問題に限らず生き物をテーマにした学習にも生かすことができます。地域で見られる生き物がどうして其処にいるのかという問いを立てることから学習を進めていくことで、生き物の生息を支えている地域の環境を構造的かつ総合的に見直していくきっかけを作ります。子ども達は、関心を持った生き物の目になって地域を見直すことで、新しい視点を得ることができ、これまで気付くことができなかった様々なことに気付くようになります。このような学



習を通して、子ども達には、見方を変えることができれば、地域から様々なものを発見することができるという意識を持たせることができます。

それは、自らが学習し新しい見方を身に付けていけば、地域に潜在する資源や可能性を引き出すことができるという気付きを、子ども達に与えることでもあり、子ども達が地域に展望を持つきっかけにもなります。

この学習は、まず子ども達に「ブッポウソウはなぜ天龍村を選んで来るのか」という最も素朴な問いを投げかけました。ブッポウソウは、日本に繁殖に渡来する夏鳥で、繁殖地は天龍村をはじめ国内で数箇所しか確認されていない希少な野鳥です。そのような希少な野鳥がなぜ毎年自分たちの村を繁殖の地として選んで来るのか。大きな謎と向かい合うことから、学習は始まりました。

2. ブッポウソウの目になって地域を見直す。「どのように」から「なぜ、どうして」へ

天龍村では、小学生も参加して村の各所に巣箱を設置してブッポウソウの保護を行う取り組みを続けてきました。ブッポウソウの観察や、何処の巣箱を利用したかという調査や、利用した巣箱の中の昆虫等の残骸からブッポウソウの餌の内容を調べるなどの学習を行ってきました。

このようにデータを集めるなどの学習は行われてきましたが、保護活動を引き継ぐことが恒例となっているため、学習はどうしても体験が先行しがちになり、毎年巣箱を設置することが主になって完結する傾向にありました。

子ども達の考える力や探究心を引き出すためには、体験以前にある「なぜ、どうして」という根本的な問いと子ども達自身が向き合うことが必要ではないでしょうか。

根本的な問いとは、皆が当たり前の事実として深く考えずに受け入れ、改めて問おうとしなかった問い、ここでは「どうしてブッポウソウは村を選んで毎年来るのか」という問いではないでしょうか。もちろん、この問いに答えはすぐに見つかりません。それは、大きな謎だからです。大人が答えることのできない問いと、子ども達が向き合うことは、大人と子どもが同じ土俵に立つこと（問いの共有）ができるということもあります。

学習の初めに動機付けとして「どうして村はブッポウソウに選ばれたのか」という問い掛けがあれば、巣箱を設置するなどの体験学習やその他の活動も文脈化され一貫性を持つことができ、より充実したものになるのではないのでしょうか。



村の有線放送で巣箱の中の様子が中継される。

3. とにかくまず、答えの見えない問いに応えてみることから始める。

一回目の授業では、生き物の目になって地域を見直す（生き物とお話する方法）を学習した後に、子ども達にそもそもどうして皆んなの村にブッポウソウは毎年繁殖に来るんだろう。こんなに広い日本列島の中で数少ない繁殖場所として皆んなの村を選んだ理由は何だろう。皆んなは考えたことありますかと問いかけてみました。

生き物とお話する方法を学習していけば、ブッポウソウともお話しができるようになって、ブッポウソウが村を選んだ理由、つまり皆んなが知らない村の秘密



や魅力をブッポウソウが教えてくれるかもしれないよ（他者の目になって地域を見直してみる）。

でも、まずみんなが今考えるブッポウソウが村を選んだと思う理由を発表してみてくださいと、子ども達に投げかけてみました。子ども達からは、山があって森が多いから、景色がきれいだから、戦争がないから、村の人たちがやさしいから、畑や田んぼがあるから、大きな木があるから、カブトムシやクワガタがたくさんいるから、天竜川があるから、街があるから等、その場で思いついた意見が数多く出されました。

これらは、子ども達が普段から村について感じている漠然とした印象ではありますが、その後の学習を重ねていく中で意味を持つものになっていきました。



4. 巣箱の周囲の環境をブッポウソウの目で見直してみる。

村の中の森や川の様子を観察する学習を何度か行った後に、村の各所に設置された巣箱を、子ども達と訪ねて回りました。ブッポウソウが利用した巣箱と利用しなかった巣箱、それぞれの周りの環境を子ども達とブッポウソウの目になって観察して、気が付いたことを地図に書き入れたり絵に描いたりしました。同時に、ブッポウソウが実際に餌を捕る様子も数多く観察できました。

学校に帰ってから、黒板に子ども達が気付いたことを描きながら巣箱周辺の環境の模式図を作りました。そこから、ブッポウソウを通じた村の特色が少しずつ見えてきました。

観察によって、子ども達はこのようなことに気付きました。ブッポウソウが見晴しの良い大木（独立木）の梢に止まって川風に流されて来る虫を狙っていること。風が河原や畑などの開けた場所を流れて杉等の木立にあたり上昇する所で、風に流されてきた虫を捕らえているらしいこと。天竜川の川風を利用していること。ブッポウソウの生息する場所では、それらの環境要素が揃っていること。

このような気付きから、村の特色も再確認できました。村の中を流れる天竜川は、深い谷底にあって両側を急な山の斜面の森に囲まれていること。里に近い川沿いに杉や檜の林が見られること。山の急な斜面には自然林が多いこと。里には、所々にケヤキなどの大木があること。川からはいつも川風が流れてくることなど村の特色が、ブッポウソウの生態と少しずつ重なってくることに気付きました。



5. はじめの学習で発表した意見を振り返り、各学年の学習テーマを結び付ける。

学習を重ねていく中で、子ども達が最初の授業の時に思い付くままに発表してくれたブッポウソウが村を選んだ理由（普段から村について感じていたこと）と、ブッポウソウを通して見えてきたことが重なり始めました。

この学習は、学校が少人数ということもあり一年生から六年生までが一緒に取り組む形で進められました。それぞれの学年ごとに、自分たちの村を知ること大テーマにして、身近な生き物、米作り、畑の作物、梅林、森や川、伝統的な祭り、ブッポウソウ保護などをテーマに総合学習を行っていましたが、それぞれのテーマがブッポウソウと繋がりがあることが、問いに応える学習を通して見えてきたのです。

6. ブッポウソウも人も喜ぶ村づくりを考える。

農業を使わずに米作りが行われている水田からは、ブッポウソウが餌としてよく捕らえるトンボが数多く羽化していること。熱心に土作りが行われ堆肥や腐葉土が施されている畑や梅林や茶畑では、ブッポウソウが餌として好むカブトムシや甲虫がよく育つこと。伝統的な祭りが代々伝わる神社には、ブッポウソウが見張りに使うケヤキなどの大木が御神木として守られていること。川沿いにはブッポウソウが川風に乗って流されてきた虫を捕らえるのに使う杉林がよく手入れされ維持されていること。山の急な斜面には多様な生物が棲息する自然林が残されていること。これらは村の人々の暮らしや文化に関わる要素であると同時に、ブッポウソウが棲息する上でも必要な要素であることが見えてきました。このようにして、各学年が個別に取り組んできた総合学習のテーマが、ブッポウソウの文脈で結び付いていきました。

問題解決型から価値創造型への発想転換

そして、人がブッポウソウをどのようにして保護するのかという一方的な発想（問題解決型）を転換して、村の暮らしや文化や自然を守り続け、より質の高いものにしていくことが、同時にブッポウソウの保護にも繋がるという気づきを得たことで、人もブッポウソウも喜ぶ村づくり（価値創造型、相乗効果）という発想が生まれてきました。このような気づきによって、自分たちは「ブッポウソウに選ばれた村」で暮らしているんだという誇りが、子ども達の中に芽生えてきました。

子ども達は、この学習を通して考えた「人もブッポウソウも喜ぶ村づくり」について、各学年の総合学習のテーマに沿って、村民文化祭で村人達に発表しました。それは、少子化や過疎高齢化などと向き合う村の人々に、問題や課題への個別対応（問題解決型）では起こり得ない価値創造型への発想転換を促すことになったでしょう。



学びとは問いに応えながら、新しい自分と出会い続けていくこと。

地域が発する問いには、決まった答えは用意されていません。それは、世の中や人が生きることについての問いにも共通することでしょう。それらの答えが用意されていない問いに、もしも、予め答えが用意されていたり、答えを選択するだけだとしたら、私たちは自分達の生を深く豊かなものにできるでしょうか。

総合学習にも、決まった答えは用意されていません。総合は、情報の分析や知識の集積だけでは実現しません。総合には、多様なものや異なるもの同士を結びつけるより高い次元での知のあり方が求められます。そして、知の総合を実現するためには、子ども達に自らが総合化する主体である（自分の方法で考える）という自覚を促す必要があります。

子ども達は、答えの用意されていない問いに応える学習を通して、多様な考え方や感じ方があることに気付くことができます。それらは、子ども達にとって本当の意味での出会いであり、それらの出会いが子ども達の心に変化をもたらし、子ども達に新しい自分との出会い、新しい自分の発見の機会を与えます。

学びとは、子ども達がひとつの問いを場として共有し、多様性とは何かを理解し、出会いを通して自分の中で生じた変化を受け入れることで「自分にはこんな考え方もできるんだ、こんな言葉を発することができるんだ」といった気付きや自信、驚きを、つまり新たな自分（より高い次元）との感動的な出会いを実感し、それを自らの成長として評価するという体験を、ひとつひとつ大切に重ねていくことではないでしょうか。

学びは、こうして人を良き出会いの連鎖の中へと導いてくれます。そして、ひとりひとりが学びを通して広げていく良き出会いの連鎖が、やがて地域や社会を支え、より良く変えていく大きな力になるでしょう。

このように、問いに応える学習によって見出される答えとは、子ども達自身による総合化の実現（体験）を意味します。そして、そのひとつひとつの答えが、子ども達に生きる力となって宿るのです。



認定NPO法人アサザ基金では、皆様の寄付や助成金などを基に、全国各地の300以上の小中学校で、ここで紹介したような学習プログラムを実施してきました。皆さんの地域でもご希望があれば、アサザ基金事務所までお気軽にご相談ください。

問い合わせ

認定NPO法人アサザ基金

300-1222 茨城県牛久市南3-4-21
TEL : 029-871-7166 FAX : 029-801-6677
E-mail : asaza@jcom.home.ne.jp
<http://www.asaza.jp>



このパンフレットは独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。